

講演会

アメリカの 一大学美術館における 一日本女性の奮闘記

日時：2022年 **11月4日**

会場：青山学院大学（青山キャンパス）

講師：大木貞子氏

国際交流基金日本美術キュレーター
青山学院大学文学部英米文学科卒業生

司会・モデレーター：西本あづさ（青山学院大学文学部教授）

(金) 13:20-14:50

本講座は対面で行います。
会場の教室は10月初頭に、センターのWebページでお知らせします。

青山学院の校友でいらっしゃる大木貞子氏をお招きし、アメリカの大学美術館のキュレーター職としてのキャリア形成と女性の自立について、ご自身の体験を踏まえてお話をさせていただきます。

※大木氏による講演要旨を裏面に掲載しています。



■大木貞子氏プロフィール

青山学院大学文学部英米文学科卒業後、渡米
ミシガン大学大学院で美術史の博士号を取得
1999年～ イェール大学美術館 日本美術キュレーター

参加方法：事前申込制・参加費無料
(どなたでもご参加できます)

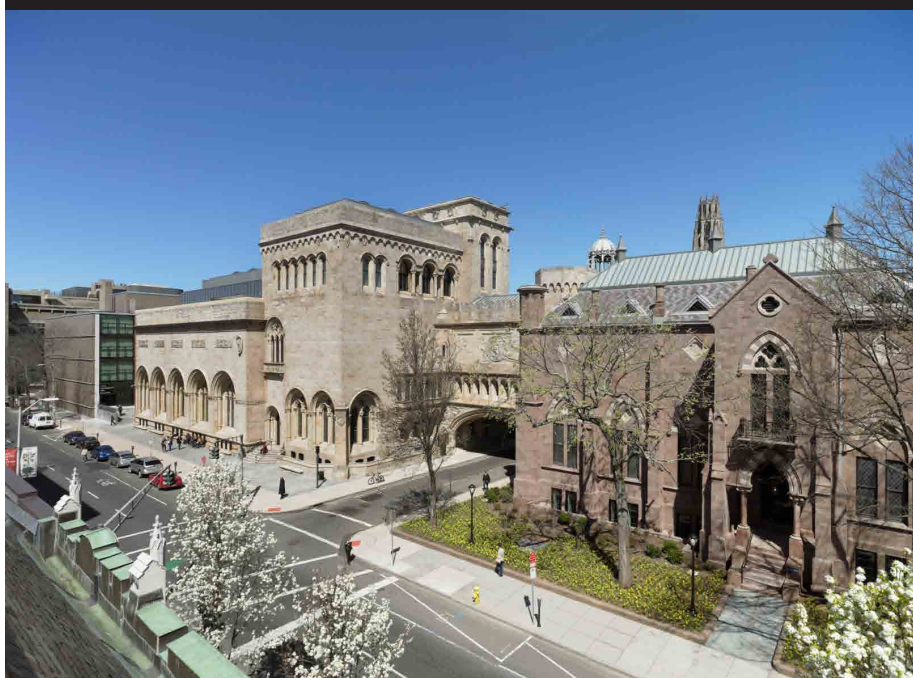
お申し込み：

右 QR コードまたはセンターの Web ページの
ニュースのリンクから、申込フォームにアクセス
してください。

※新型コロナウイルス感染症の感染状況によって
予定を変更する場合があります。

問い合わせ先：agu-smcgs@aoyamagakui.jp

主催：青山学院大学附置スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター
後援：青山学院大学文学部
協力：青山学院大学英米文学科同窓会



上：チャペル通りから見たイェール大学美術館の3つの建物
右から 1866年建造 ストリート・ホール
1928年建造 オールド・アート・ギャラリー
1953年建造 ルイス・カーン ビルディング

下：2012年12月 改造後の美術館 西側
ルイス・カーンによるデザイン
1953年建造
Yale university art gallery (YUAG)

青山学院大学 ジェンダー研究センター主催・文学部後援・英米文学科同窓会協力

「アメリカの一大学美術館における 一日本女性の奮闘記」

国際交流基金日本美術キュレーター 大木貞子 Ph.D.

2022年11月4日(金) 13:20-14:50

[講演要旨]

本講演では、初めに講演者がジェンダー研究の専門家ではないことをお断りした上で、特に若い大学生・大学院生の皆さんの将来に役に立つことを念頭におきながら、アメリカの大学美術館のキュレーターとしての経験とそこへ到達するまでの道のりについてお話しする。

美術系の職場はキュレーター職を含めて女性が多い。イエール大学美術館の例をとってみると、他に教育部のキュレーター、登記担当、展覧会の準備担当、修復担当、IT 担当、広報担当、報道用カメラマン、その他さまざまな部署があり、守衛さんを除けば圧倒的に女性である。ただし、重要な職は男性が占めることが多い。とはいえ、イエール美術館の職員のほとんどが美術愛好家ないしはアーティストであり、仕事場に一体感があることはありがたい。

商業本位の大きな美術館とは異なり、アメリカの大学美術館の特徴は、その大学の卒業生の寄付で所蔵美術品が増加することである。異人種の集合体であるアメリカという国で、どの大学を卒業したかはその人の一生を左右するため、卒業生の愛校心の深さは崇高なほどである。ちなみに美術品相応の寄付額は免税になる。キュレーターは、コレクションが偏らないよう、寄贈された美術品と新たに買い付ける美術品とを吟味し、常設展と特別展を企画し、図録を作成し、自分の大学の学生のみならず一般の人々にも、所蔵する美術品を通して美と文化的価値とを伝える。

イエール大学美術館アジア部の日本美術の過去 24 年の成果を通じた経験談もお話しする。キュレーター職として仕事を成功させるためには、3 つの組織的協力が不可欠となる。第一に、美術館館長や教授陣を含む大学組織内部における協力体制、第二に、美術館経営の中核にある理事たちの中の日本美術愛好家の存在と彼らの協力、そして第三に、基金つきの日本美術キュレーター職（基盤となる資金が確保された常設のポスト）の確保と支持の獲得である。講演者の場合、初めのうちは上首尾であった。しかし、2012 年のイエール美術館展示空間の拡張に伴う財政危機が起これると、雇用をめぐる問題が続出し、微妙かつ巧妙な差別問題にも直面した。そこから、講演者個人の反省と修正も含め、大きな組織の中での生き抜き方を学んだ。

最後に、女性の自立に関して個人的体験を含めて考察する。